

講評

「ひきこもり」とは、病名ではなく、誰にでも何歳からでも起こり得る状態です。しかし、大半の本人は、発信することなく人との交わりを避けるのが特徴で、また家族も自らの責任と思ひ込み、それぞれ知られないように生活していることが少なくありません。そのため、こうした世帯の悩みや存在すらも、なかなか周囲には見えないまま高齢化し、生活に行き詰る「8050 問題」が最近、地域で顕在化しています。

掛川市が行った調査は、そんな予備軍が数多く潜んでいるであろう 7040 世帯、8050 世帯の「所得がない」、あるいは「所得不明」の本人と同居家族の双方に回答を求めた全国でもあまり例のないデータであり、知られざる 8050 問題の実態を窺い知る、とても興味深い内容といえます。

調査によると、全体の回答者は 251 人。そのうち、現在就労活動をしておらず、「ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事するときだけ外出する」まで含めた状態が 6 か月以上続くなどと回答した「広義のひきこもり群」該当者は 29 人でした。

その 29 人のひきこもり本人に絞って見てみると、例えば「たとえ親であっても、自分のやりたいことに口出ししないしてほしい」と答えた人が 20 人に上るのは、家族のふだんからの関わり方を考えるうえでも本質的で注目できます。全体回答者を見ても「口出ししないほしい」が 6 割を占めていました。

また、本人 29 人のうち「生きるのが苦しい」と感じているのは 22 人。生きていたいと思えなくなっている心情が窺えます。「人に会うのが怖い」と感じている本人も 14 人で、「集団の中に溶け込めない」10 人と併せ、多くが社会の人間関係の中で傷つけられ、家の中だけが安心できる生存領域になっていることを表わしています。その一方「家族に申し訳ないと思うことが多い」と 13 人が回答。家族の世話になっている現実にも後ろめたさを感じていることもわかります。

「ふだん悩み事を誰かに相談したいと思う」と答えた人が 15 人と半数を超えているのも興味深いです。この結果から、本人は相談したいと思っているのに、支援の受け皿が十分機能していない課題も推測できます。

このことは、支援のあり方についての自由記述からも「気軽な出会いの機会を作してほしい」「大事な所を言わない事が市の関係者に感じる時がある」「“一人の人間”として扱ってほしい」「気軽に行ける場所がほしい」などと綴られています。仕事をしたいというより、1 人の人間として生きていきたい。でも行く場所がない。そんな本人たちの心情が感じ取れました。

そして、同居者の調査についても、対象者の内訳を見ないとわからない部分もありますが、やはり支援のあり方についての意見は注目できます。「本人に仕事の話をするのだまってしまって対話が出来ません」「家の内まで知られてしまうのが不安」などは家族の代表的な葛藤だと思います。記述にある「ひきこもりを特別視することなく、相談者に寄り添ってもらえる窓口の設置を望みます」といった声は、私たち家族会が国に要

望している「病気でも障害でもない」制度の狭間に取りこぼされた「ひきこもり状態に特化した基本法制定」の支えにしていきたいと考えています。

ジャーナリスト・KHJ全国ひきこもり家族会連合会副理事長 池上 正樹



プロフィール

28年前から「ひきこもり」関係の取材を続け、数千人の本人たちの話を聞いてきた。また、「KHJ全国ひきこもり家族会連合会」を発足当初からサポートし、仕事を超えて家族相談にも乗ってきた。現在、江戸川区ひきこもり支援協議会委員、港区ひきこもり協議会委員、厚労省ひきこもりに関する地域社会に向けた広報事業企画検討委員等を務める。東日本大震災時、ひきこもる人が震災でどう行動したかを調査。2012年から10年間開催した対話の場「ひきこもりフューチャーセッション庵」設立メンバー。NHK『クローズアップ現代+』『あさイチ』をはじめ、テレビやラジオにも多数出演。Nスペドラマ「こもりびと」、NHK土曜ドラマ「ひきこもり先生」、NHKドラマ「星とレモンの部屋」などの監修も務める。著書は『ルポ「8050問題」～高齢親子“ひきこもり死”の現場から』（河出書房新社）、『ルポひきこもり未満』（集英社新書）、『大人のひきこもり』（講談社現代新書）、『ひきこもる女性たち』（ベスト新書）など多数。日本文藝家協会会員。